



**地球温暖化対策と生物多様性保全への取組**

寄稿：正 本 英 紀 (徳島県県民環境部環境局環境首都課係長)

**【地球温暖化による生物多様性への影響】**

私は昨年4月に徳島県南部総合県民局から県庁の環境首都課に転勤となり、以来地球温暖化対策の推進について仕事を進めてきました。着任して思ったことですが、地球温暖化対策というのは非常に幅広い知識が必要なジャンルであり、相当な激務であるということです。生物多様性との関係はもちろんのことで、地球物理、エネルギー、機械設備、交通工学、税制、法令、金融システム...と挙げればキリがありません。もちろん、分からないことだらけで、夜遅くまで仕事に明け暮れ、研究者や技術者、事業所、民間団体のみなさんと絶えず連絡や議論をしながら進めています。

現在、徳島県においても、過去100年で1.28℃と平均気温が上がっており、特に最近の温度上昇が著しいこと、また夏日や真夏日が増加していることは御存知のことと思います。降水量についても少雨と多雨の変動幅が大きくなってきています。さらに海水温についても過去40年間で紀伊水道海域において1.5℃、太平洋岸で1℃の上昇が見られます。IPCC(気候変動に関する政府間パネル)の第4次報告書によれば、今後100年の間で平均気温がさらに3~4℃上昇する可能性を指摘しており、自然環境や農林水産業、都市生活、自然災害など、様々な領域での重大な影響が心配されています。現在九州で起きている米の白化現象をはじめ、愛媛県で起きている柑橘類への影響、本県でも起きているニホンジカなど野生動物による食害の急速な拡大やオニヒトデのサンゴ被害など、日本の自然界においても兆候と呼べるものはすでに起きていると考えています。

しかしながら、地球温暖化対策ということは同時に全ての人間活動への挑戦とも言い換えることができます。世界中の人々の生活を変革するというのは相当な難事業で、気候変動枠組条約締約国会議でも、状況が刻一刻と変化しているにも関わらず、未だに具体的で効果のある合意はできていません。非常に難しいのかも知れませんが、最後まで世界全体ができる努力を尽くしていくべきであると希望しています。

**【地球温暖化対策と生物多様性のつながり】**

今、徳島県で地球温暖化対策として実施している事業で、生物多様性とのつながりがある事業として「エコハット・エコマント」と「カーボン・オフセット」の2つを御紹介しましょう。

「エコハット・エコマント」とは屋上緑化と壁面緑化の意味であり、建物の集積したところで行うことで、外壁温度を2℃、室内温度を2~3℃下げることにより、主に夏季のエネルギー使用量を下げようという試みです。しかもここで本県ならではの提案として「県内自生種による緑化」を掲げているところに少し光の部分があると考えています。まだ現在のところは種類や栽培手法、植栽手法の検討や試験を行っているところですが、従来の外来種主体の緑化に比べ、少しでも生態系に配慮した緑化で地球温暖化対策を進めることができると考えています。

一方のカーボン・オフセットですが、これは事業者や県民が、自らの努力でどうしても減すことのできない温室効果ガスについて、中小企業の省エネ対策による排出削減量や森林整備・自然再生などによる吸収量を購入することによって「埋め合わせ」という制度で国際排出権取引や国内排出量取引の「ミニチュア版」として期待されているものです。従来は慈善活動の感があった自然再生が経済活動とつながることで大きく期待されています。現在はまだまだ模索状況ですが、「とくしま環境県民会議」での産学民官の取組を通して合意を図ろうとしています。



**【一言メッセージ】**

(編集担当)

地球温暖化防止と生物多様性保全は、環境問題の二大テーマです。この難問に一石二鳥で取り組まれていることは、正にコベネフィット・アプローチですね。去る4月20日に政府から「緑の経済と社会の変革(日本版グリーン・ニューディール)」が公式発表されました。生物多様性保全関連のキーワードを見てみると、**緑の社会資本への変革**の中に「都市にビオトープ」「里地・里山の保全」「エコツーリズム」「環境保全型農業」などがあがっています。目玉は、**緑の消費への変革**のようで「省エネ家電・省エネ住宅の爆発的普及」「次世代自動車等の本格普及」として、家電のエコポイントやエコカー購入の助成が強調されています。**緑の社会資本**にもメリットシステムが欲しいですね。

ビオトープ・サロン お便りコーナー

寄稿：篠原幸代（読者）

【生物多様性はそんなに難しいことではないと思います】

私が子供の頃にはよく見かけたアマガエルや、家の中にまで入ってきたアカテガニ、それから家の前の川には大きなハゼがいてよく釣って遊んだものでしたが、最近は見かけなくなりました。触るとヒンヤリしているアマガエルや、大きくて真っ赤な手のアカテガニなどは、格好のおもちゃでしたが、いなくなって本当に残念です。自然環境の変化を身近に感じ、レイチェル・カーソンの「沈黙の春」を思い出します。でも、幸いなことにすぐ近くの川には秋に飛来するカモやカモメがいて、可愛い仕草で楽しませてくれます。

私が育てている小さな菜園には、どこにでもいるスズメの他にジョウビタキ・メジロ・ヒヨドリ・イソヒヨドリ・ムクドリ・モズが飛んできます。一番悪いことをするのは、ヒヨドリで、大事に育てている無農薬苺を熟れる前に啄ばんでしまいます。リンゴやミカンを半分に切って、木に刺してあげているのに・・・です。感心したのは、モズです。細い枝に細いムカデをととも器用に刺していますが、刺したことを忘れたのか他に美味しい物があつたのか？ミイラ化して風化しそうになって今も刺さっています。可愛いのはジョウビタキとイソヒヨドリで、畑から出てきたコガネムシの幼虫などの虫をバケツに入れておくと、食べにやってきます。ジョウビタキは私が草抜きなどの作業を始めると、いつの間にか1メートルほどの距離まで近づいてきて私が虫を掘り出すのを待っています。虫を見つけたら何気なくポイッとジョウビタキの方向に投げてやると、当たり前のように食べています。うまく人間を利用する賢い鳥だなあと感心しつつ、信頼されているようで嬉しいものです。イソヒヨドリは5月くらいになると、ウグイスに勝るとも劣らない美声で囀るのが楽しみです。すぐ隣の広い菜園では、今年もウグイスが囀っています。3週間ほど前までの初音は下手でしたが、今はだいぶ上手になりホーホケキョと囀るようになりました。身近な自然を感じながら花や野菜の手入れをする時間は、ホッと出来る大事な時間になっています。

生物多様性はそれほど難しいことではないと思います。環境さえそろえば、多種の生物や植物が自然と集まってくるものです。多自然型工法とか言いながら、自然の石をコンクリートで固めた川のり面を見つけるとガッカリします。川の堤防もツルツルのカミソリ堤防ではなく、カニの爪が引っかかる程度のギザギザをつけた堤防にして昔のような竹林があれば、今でもアカテガニがその辺を闊歩していたことでしょう。そして、満月や新月の大潮の夜にはアカテガニの雌が産卵のために大集合している地域色溢れる光景を楽しめたのに・・・子供達に自然に環境教育ができたのに・・・そう思うと残念な気持ちでいっぱいになります。

本当の意味での多自然型工法やビオトープの作り方をみんなが関心を持って理解する必要があると思います。陸に住むアカテガニが海の大潮の日を知っているのはなぜ？こんな疑問を抱けることって、幸せなことだったのですね。

ビオトープ・ナビ Q&Aコーナー

記者：犬伏潔（会員）

【Q（質問）Mさん】

ビオトープとは人工的につくったものですか？

【A（回答）野生生物の生息生育空間】

ビオトープはドイツ語のBio(生物)とTop(場所)の造語です。ドイツ連邦国では「有機的に結びついた生物群集すなわち生物社会の生息空間。最低限の面積を持ち、周辺空間から明確に区分できるまとまりを示しているもの」と定義され、自然と共存する国づくりのために、国土計画や地域計画をはじめ、都市や農村整備を行う際の指標や景域分析の単位として導入されました。

本来の意味では、林、草地、湿地、干潟、川原、河川、湖沼など、自然の場所そのものを指します。ビオトープという言葉が日本に導入され、広まったのは「河川整備における多自然川づくり」や「学校ビオトープ」がはじまりでした。その後一時期ブームとなり、商品名に用いられたり、人寄せパンダ的な扱いが加わったりし、様々な解釈による歪曲を生み、誤解も広がりました。

また、環境教育の場として整備するものをビオトープと区別する意味で、「学校ビオトープ」や「園庭ビオトープ」と呼称し、普及が図られています。いずれも、整備は最低限に留め、仕上げは時間と地域の自然に委ねることが原則です。むやみに植栽したり、生物を持ち込んだり、飼育したりするものではありません。

最近では、普及と共に誤解も多いことから、ビオトープと区別する意味で、人工ビオトープ、電動ビオトープ、バイオガーデンなど、新しい表現も出現しています。

とくしまビオトープ・プランでは「地域本来の野生生物が住み続けられる場所」と定義されています。

ビオトープ・ナビ 雑学コーナー

記者：榎本幸実（会員）

【篠原さんのお便りから】

お便りの中に、面白いキーワードが目にとまりましたので、取り上げさせていただきます。

木に刺してあげているのに

刺しているからやってくる？・・・きっと、餌をやらなくてもやってくる良い環境だと思います。刺してあげているから、ついにつまみ食いなのでしょうね。メタボにならないように、餌はほどほどに・・・ということでしょうか？

刺したことを忘れたのか

忘れたのでしょうか。ご存知のことと思いますが、「モズの早贖」ですね。物をしまい込み、その場所を忘れてしまう例えにも使われます。このモズの行動は「餌の少ない冬に向けた備蓄」とか「餌をちぎりやすいように刺したところに邪魔が入った」とか、諸説あるようです。

冬に備えて餌を備蓄する動物はたくさんいますが、ドングリやブナの実とアカネズミやカケスなど、自然のつながりや生き残り戦略には感服・・・脱帽です。アカネズミは、虫の入っていない良質の実だけを選び分けて笹や灌木の茂みの脇に、ひたすら埋めるそうです。その場所は、天敵のフクロウに襲われにくい場所です。また、ブナにとっては、幼木期には灌木が日照から保護してくれ、程よく育つ頃には、灌木の背丈を追い越してしっかり枝葉を伸ばせる空間が広がっている場所と言うことです。ブナが数年に一度しか実をつけないのは、毎年つけるとアカネズミが増えすぎて、実を全て食べてしまいブナが子孫を残せなくなるから・・・との説があります。

編集後記

ビオトープに関するお役立ち情報はもとより、皆様の活動やお仕事、日常生活を通じて見たり感じたりしたこと、身近な自然の春夏秋冬や喜怒哀楽のご寄稿をお待ちしております。ふるってご参加ください。 編集：榎本幸実